

2023年8月13日 久宝教会 礼拝メッセージ

「〇〇は忘れたところに」

水谷憲牧師

聖書 ルカによる福音書 12章 35-48節

本日与えられた聖書は「目を覚ましている僕^{しもべ}」というイエス・キリストのされた話です。この話は大まかに言えば、私たちが神様から預けられた財産を清算する決算の日。すなわち「この世の終わり」とキリストの再臨がいつになるのかは、私たちに知りえない。私たちが安心して、すっかり忘れていたところに突然ヒュッとやってくるかもしれない。だから、常に目を覚まして準備しておきなさい」という話であるわけです。黙示録の3:20には「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」と書かれてありますが、今日のルカ福音書では主人の帰りを目を覚まして待っている僕は共に食事の席に着く光栄が許されるのみならず、主人によって食事の世話までしてもらえという、そのような幸いに与^{あずか}れるのだといわれています。

この箇所について、スイスの牧師であったヴァルター・リュティという人は、こういうふうに言っています。「『主人の帰りを待つ人のようであれ』と言われているが、そのような人とは、どんな様子をしているのか。彼らは、腰に帯を締め、灯りをもっている。それは、いつでも出発できる用意をしているということである。それは、競争の時、スタートの合図を前にしたあの息詰まるような瞬間である」と。このようにリュティという人は言うのですが、果たして本当にそうなのでしょうか。いつでも出発できる用意をしているということが、そのまま「競争の時、スタートの合図を前にしたあの息詰まるような瞬間」につながるのでしょうか。よく「ヨーイ・ドン!」と言ったらスタート」という言葉に、みんながずっこけるネタがありますが、神様は私たちに、そんな極度の緊張を強いておられるようには、私には思えないのです。そんなピリピリ緊張しながら、「今か今か」とずーっと待っとくのは、さすがにしんどい。

私は高校卒業と共に家を出て、他県の大学に進んだのですが、ある時、福岡の実家へ帰ったついでに、高校時代の友人たちと夜飲みに行き、帰りが真夜中になってしまったことがありました。家のちょっと手前でタクシーを降りて、こそーっと鍵を開けて「気付かれないように家の中に入ることにしよう。まあ何とかなるやろ」と酔った脳みそでぼんやりと考えていたところ、真っ暗の玄関のドアの前で、黒い影がぼーっと立っているんです。ドキー!として金縛りにかかったまま見ていると、私の帰りを今か今かと寝ずに待っていた母親が、鬼のような形相でこちらをジーっと睨みつけておるわけです。心臓がキューッと握られた思いで、もう幽霊のほうがよくぽどかわいと思った。蛇に睨まれた蛙のように、酔いなどすっかり冷めきってその場から逃げることもできずに固まってしまった私は、母親からえんえんと呪

いの言葉に等しい説教を聞かされ、ああ煉獄とはこのような場所であろうかと思わされた、そのようなことがありました。しょーもない話をしましたが、つまり、いつ帰ってくるか分からない者の帰りを今か今かと息詰まる思いで緊張して待つというのは、待つ方もストレスがたまってしんどいし、また待たれる方のキリストとしても、私の母親のようにいらいらしながら待ち伏せるような僕しもべの所には、「あんまり帰りたくないなあ」と思われるかもしれません。

確かに、冒頭の「腰に帯を締め」という言葉、当時の人々の服装は長く垂れた衣が一般的で、そんな格好では働くには邪魔だったため、みんな動きやすくするために、下着の裾を膝の上まで端折り、帯の間に挟んで腰にからげたものであったといえます。日本でも、昔はいわゆる和服をみんな着ておりましたが、そんな袖も裾も長い服では確かに動きにくいですから、人々は何かする時にはたすきがけを試みたり、裾を端折って腰の下辺りで引っかけたりしていたものでした。江戸時代の旅人を描いた浮世絵や時代劇などを見ても、裾を端折ってからげた人の姿が見られます。このように、この聖書の世界の人々にとって、腰に帯を締めるということは裾を捲り上げてからげることであり、それはたすきがけと同様、何かを今から本格的にさあやるぞ、という意気込みを表すものでもあったわけです。

しかし、だからといって、その裾を引っからげる行為から、神様が私たちにスタートの合図を「今か今か」と待っている競馬馬のようであれと言われている、と理解するべきではない。そんな極度の緊張状態が長続きするはずもなく、それは私たちにとってあまりにしんどい。そんなことしたら精神病になってしまうわ。確かに神様は腰に帯を締めよと言っておられますが、その一方で神様は「ともし火をともしないさい」とも言われているんですね。ともし火というものは当時の人々にとって不可欠の家庭用品であって、それは単に照明のためだけでなく、当時簡単に手に入れることのできなかつた火種を、常に手元に備えておく手段の一つでもありました。「災害は、忘れたころにやってくる」。みなさんも、いつか必ず来るという南海トラフの大地震であったり、あるいはその他の大きな災害が起こったりする時のために、何らかの備えをしておられるかと思えます。「ともし火をともししておく」とは、そういう、急に必要になった時のことを考えて備えておくということでもあります。「帯を締める、裾をからげておく」ということが非常に動的な備えの姿であるのに対し、「ともし火をともししておく」「必要な時のために火種を備えておく」ということは、対照的に非常に静的な備えの姿だといえます。ですから神様は私たちに、号砲が鳴る瞬間を、今か今かと緊張して待つような姿を求めておられるのではない。そんな、競馬馬が入れ込んでいるような、そんな姿というものは例えば、パチンコ屋の開店を待つ人々、あるいは西宮神社の新年の「福男選び」のように、自分が他人よりも少しでも早く、より大きな恵みにあずか与えるようにという姿へと簡単に変わってしまう

ものであり、そこからは隣人あるいは兄弟姉妹と一緒に恵みに^{あずか}与ろうというような思いは見えにくくなってしまいうように思うわけです。イエス・キリストがこの「目を覚ましている僕^{しもべ}」のたとえを通して私たちに伝えようとした備えの姿というものは、同じ目を覚ましているにしても、「今か今か」というよりは、むしろ「準備はできてるんで、いつでも行けますよ」といった、ゆとりをもった姿勢のことだったのではないのでしょうか。

よく消防署の前を通ると、消防士たちが訓練をしていることがあります。ある時は筋トレであったり、ある時はロープワークのような技術的な訓練だったりするのですが、それはみな、いざという時しっかりと皆を助け、皆に喜ばれるような働きをなすことができるための、平穏な日常の中での備えの姿です。それは例えれば「待機電力」のようなものかもしれません。「待機電力」とは、電気製品を使っていないのにコンセントをさしているだけで消費されてしまっている電力のことで、言ってしまうえば、無駄な電力のことなのですが、イエスは私たちに、一見無駄なことのように見えようとも、コンセントを抜いてしまうのではなく、いざという時に慌てることなく、いつでもすぐに動けるように備えておきなさいと、そう言われているように思えるのです。ですから私たちは、この箇所を読んで、イエス様はいつ来るか分からないから、それまでに少しでもたくさん善行を積んでおかなければとか、祈りの習慣を欠かさないようにしなければとか、強迫観念のように思ってしまうかもしれませんが、信仰生活というものは、本当はそんな何かに追われるようなものではないはずです。そうではなく、自分が本当にしょもない人間であるにもかかわらず、大きな愛を注いで下さっている神様に対する感謝の思いや、こんな自分のためにその命を献げ、代わりに十字架で死んで下さったイエス・キリストに対する感謝の思いを、時々でも思い出して新たにしてくうちに、来るべき日への備えはきっと自ずと形作られてゆくものなのではないか。私たちが自分を救ってくださったキリストへの愛や感謝の思いをすっかり忘れてしまったとき、私たちは45-46節にある言葉「しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思い、男女の召し使いを叩いたり、食べたり飲んだり、酔ったりし始めるならば、その僕の主人は、全く思いもよらない日と時に帰ってきて、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる」のようになってしまう。来るべき日がいつなのか分からないから、再臨のキリストはいつ来られるのか判らないから、もうちょっと自由にしておこう。まあまだ来ないだろう。そうになってしまうのではないのでしょうか。

来るべき日はいつなのかは私たちには誰にも分かりません。分からないから備えるのですけれど、キリストは「明日のことを思い悩むな」とも言われました。いつ来るか分からないものを今か今かと息詰まる思いで、緊張しながら待つのではなく、私たちはその日がいつ来ても、忘れていたところに突然来たとしても慌てることのない

いように、余裕をもって備えておいたらいいんです。それは、テストを控えてピリピリしている学生や、内申書を気にして固くなっている受験生のような、そんな姿ではない。神様もキリストも私たちに、ありのままの、そのままのあなたが大事で愛すべき存在なのだと伝えてくれています。だから私たちが来るべき日の備えとしてなすべきことは、神様から注がれている愛を今度は隣の誰かに注いであげること、イエスによって与えられた慰めや励ましを、今度は隣の誰かと分かち合うこと、私の罪が赦されている分、今度は隣の誰かを赦そうとすることなんです。もっと簡単に言えば、「おはようございます」と元気よくあいさつすること、「ありがとうございます」と感謝の気持ちをきちんと伝えること、「ごめんなさい」と素直に謝ること、「いいよ」と気持ちよく許すこと。そんなささやかな愛と平和のかかわりこそがきっと、神様が私たちに期待してくれていることなんです。だから、私という存在が愛され、支えられ、生かされているということの喜びをもって私たちが日々を隣人と一緒に歩いていくな、本来この御言葉はそれほど気にかけるほどのものではなくなるはずなんです。

私たちは日々の自分の姿を振り返ることは大事なことですが、私たちは来るべき審判のために生きているわけではない、裁かれるために生かされているわけではないんです。私たち自身、愛され生かされている喜びを、隣人と共に分かち合いつつ日々を歩いていきましょう。私たちの忘れていたところにキリストが不意打ちで来られたとしても、慌てないでいれるような、そんな私たちになりたいと思います。

最後に、一言だけ。私事で大変恐縮なのですが、8月の2日。もう2週間が経とうとしておりますが、私の6歳下の弟が、突然亡くなりました。46歳でした。お連れ合いとの二人暮らしでしたが、お互いに仕事を大変忙しくしておられたようで、忙し過ぎてなかなか二人でゆっくりとした時間もとれない中での、突然の死であったようです。自分でいうのもなんですが、本当によくできた弟でした。そんな、誰からも愛され、必要とされていた彼が、こんなに突然に死ぬなんて、自分でもびっくりしていることだと思います。私たちはすっかり「人間はいつ死ぬかわからない」ということを忘れていました。弟はたくさんの大切なことを成し遂げ、多くの人に良い感化を残し、与えられた命を精一杯使い切りました。ただ、お連れ合いとだけの、二人だけの幸せの時間をもっと持つことを後回しにしてしまっていた。「自分も含めて、人間はいつ死ぬかわからない」ということを忘れていたんです。災害、病気、死、人生の終わり、愛する者との別れ、この世の終わり、私たちにはいつそれが来るのかはわかりませんし、それは私たちが忘れたころにいつも突然やってきます。「まあまだ来ないだろう」では遅いんですね、きっと。この世の終わりがいつ来ても慌てないように、またいつみんなよりも先に神様の御許に召されても悔いの残らないように、毎日を送っていきたいと思います。